

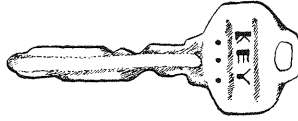
# 私が幼児教育を志した頃(7)

津守 真

## 昭和二十二、三年頃の日本の社会

敗戦後二年を経た昭和二十二年の夏には、大学生生活は安定して軌道に乗ってきた。

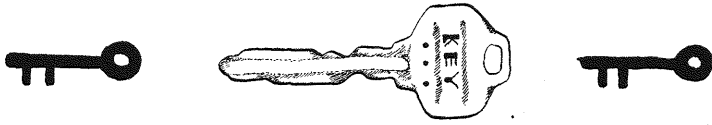
昭和二十一年九月には軍隊から復員した学生も含めて卒業式も行われた。私は南原総長が講演される式には欠かさずに出席した。当時は新聞紙上に南原総長の式辞の要約が掲載されるのが常であった。次にその演題を記しておこう。昭和二十一年九月卒業式「祖国を興すもの」、昭和二十三年三月卒業式「職業の倫理」、昭和二十三年九月「人間の使命」、昭和二十四年三月「平和の擁護者」である。私が卒業したのは昭和二十三年九月である。そのとき主題はシュヴァイツァーだった。教育基本法、学校教育法が公布されたのは昭和



二十二年三月であり、四月には学校教育の六三制が始まり、五月には新憲法が施行された。六月には片山哲による社会党内閣が成立した。昭和二十二年十二月には児童福祉法が公布された。他方、戦時中の言動による公職追放は財界、言論界にまで広がり、旧秩序に属する人達には大変な時代であった。私共学生にとっては、日本の社会は新しい方向に向かって前進しているという実感があつた。

### 高崎能樹先生「阿佐ヶ谷東教会幼稚園」

私は実験心理学の方法によつて子どもの方向定位と描画模写の研究をしていたが、身近な子どもだけでは不十分で、もつと多くの被験者が必要とした。高木貞二先生から山下俊郎先生への紹介状を持つて、私は愛育研究所を訪れた。戦後、愛育研究所の教養部長は岡部弥太郎先生から山下俊郎先生に代わっていた。その折りに山下先生は私にヴァンデウオーカー・N・C著『アメリカの教育における幼稚園』を見せてくださった。一九〇八年に出版されたその小さな書物には、十九世紀半ばからの米国の幼稚園の初期の歴史が記されていたが、どのようにして現代の幼稚園につながるのか、中間は空白だった。私は岡部先生からフレイベルを学び、フレイベルの幼稚園が米国で批判を受けたのは知っていたが、フレイベルの何が批判されたのか、何が進歩主義教育に継承されたのか、疑問のままだった。この書物は、後に私が米国に留学したときに暇をつくつては図書館にもぐり込んで古い雑誌を調べることになった端緒である。ずっと後に「フレイベル以後の幼稚園」の

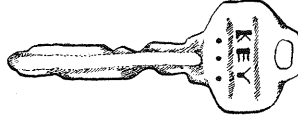


出版をすすめてくださったのは山下俊郎先生である。

山下先生は、私を阿佐ヶ谷東教会幼稚園の高崎能樹先生に紹介してくださった。昭和二十二年秋である。短めの黒い小倉のズボンをはいて丸顔の柔和な風貌の先生は既に頭が禿げておられた。小柄な奥様は戦時中のもんべ姿で、子どもたちの世話を焼いておられた。学生服の私を両手をひろげて笑顔で迎えてくださった。それから一年以上にわたって私はこの幼稚園に通うことになった。先生ご夫婦は、教育学を専攻しておられた一人息子の高崎毅さんの復員を待ち侘びておられた。

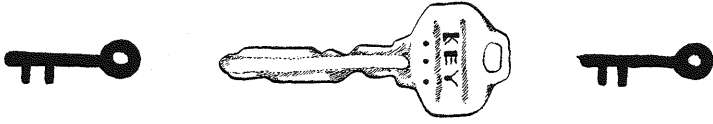
高崎能樹先生の幼稚園で私が与えられた部屋は二階の小さな部屋だった。ひとりずつ子どもに来てもらって立方体、円筒、円錐など、ボール紙で作った実物を見せながら描いてもらった。子どもたちは順番が来るのを待っていた。だいちゃんという名の三歳の男の子は、いつも私の傍らにくっついていて。主任の竹内先生は私の研究が進むようにといつも気を遣われた。

高崎先生の幼稚園では、朝の会集があった。広い遊戯室に園児全員が集まる。「おはなしの先生」としても有名な高崎先生のおはなしが面白かった。それが終わると、一組ずつ並んで各自の部屋にゆく。庭で遊ぶ時間もかなりあったが皆部屋に入ってしまうと園庭はがらんと静かだった。当時は子どもの数が溢れていたから、外で遊びたい子は外で、内で遊びたい子は室内で遊ぶようにすればよいのにと、私は疑問をもった。ある日、先生は「つもりくん、明日は朝のお話しをやってくれ給え」と言われた。私はその頃毎週日曜日



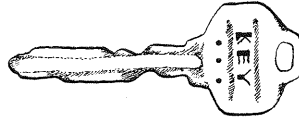
には今井館で午前は矢内原先生の聖書講義、午後は日曜学校をやっていたから、同じようにダビデの話をした。話しながら何か雰囲気違和感を感じた。話の途中で移動したり、しゃべったりする子どもがいるとクラスの先生から注意されるのである。それは話が子どもを引き付けるちからをもっていない証拠で、子どもに注意することではなく、話し手の力量不足の問題だと私は考えていた。また、それは話の始まり方にも関係があるかもしれない。朝の会集は全員が鐘の音で集められる。私の日曜学校の場合には、子どもと一緒に遊んでいて集まる時間を見計らうから、子どもの側に聞こうとする心の準備ができてい。私はこんなことも高崎先生と話したと思う。

高崎能樹先生は私にしばしばご自分の苦勞話をされた。戦争中、特高警察から睨まれた話になると先生の語調は激しくなった。先生はキリスト教の牧師で、天皇制に対する批判的な考えをもっておられ、説教にもそれはあらわれたのだろう。私服の特高警察が礼拝のときにも後部の座席にいたこと、幼稚園でも毎朝宮城遙拝をするようにいわれても絶対に承知しなかったことなど憤慨をもって語られた。高崎能樹先生は中学生の頃には不良少年で、「さらし」の腹巻きに短刀を挟んで肩で風を切って歩いていた。その短刀を相手の眼前で床に突き立てて喧嘩したという。キリスト教に出会ってから、短刀を捨てて、だれが見ても穏やかな人になったのだが、その激しい気性をもって軍の指導に対して反骨を示した。「おはなしのおじさん」でもあった先生の話は真に迫っていたが、書き留めておかなかったのをいまになって残念に思う。



先生は当時『子供の教養』という幼児教育の小さな雑誌を発行しておられ、母の講座を開いておられた。小林恵子「母のための教育雑誌『子供の教養』について」（国立音楽大学研究紀要一九九二、一九九二）によれば、『子供の教養』誌は昭和四年に武南高志によって創刊され、昭和十七年に休刊、昭和二十二年に高崎能樹によって再刊されて昭和二十八年まで続いた。高崎先生はこの雑誌の創刊以来、その編集にかかわっていた。昭和十七年に紙の配給停止という理由で廃刊になったが、実際は軍部の反感を買ったためだったという。

これに対して同じ時期に発行されていた倉橋惣三主幹の『幼児の教育』誌、つまり本誌は、昭和十九年十月号まで紙の配給を受けつづけ、昭和二十一年十月に復刊になるまで二年間休刊となったが、それは戦争末期の空襲と、戦後直後の物資不足によるもので、この雑誌が軍部の批判の対象となったことはなかった。このようなことから、戦後になって、倉橋の戦時中の言動が批判されたことがあった。戦争中の日本の社会の空気を考えれば、容易な批判はできない。戦時中に軍を批判することは命懸けのことだった。高崎能樹はそれを覚悟で批判した。倉橋には、守らねばならないものがあつた。フレールベルが説き、米国の進歩主義教育が主張したこと、幼稚園を幼児の遊ぶ場とするためには、あらゆることに辛抱を重ねなければならない、ある点では周囲と妥協もせねばならないという倉橋の決意によるものだったと私は思っている。倉橋は遊びを中心とする幼児の生活の流れを東京女高師付属幼稚園で守り通した。そのために昭和二十一年三月に来日した米国教育使節団

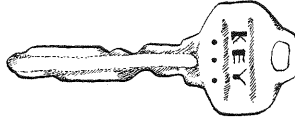


は、小学校以上の教育には厳しい批判をしたにも拘わらず、女高師付属幼稚園を訪れたときにはきわめて好意的な観察をし、「日本の幼稚園は米国のそれとあまり違いはありません」〔『幼児の教育』四十五巻一号〕と報告している。倉橋は昭和二十一年に教育刷新委員会の委員となり、南原繁、森戸辰男、務台理作らと共に教育基本法の原案作りに挺身寄与された。

### 各地の幼稚園

昭和二十二秋、東京女子高等師範学校教授だった波多野完治先生が学生を幼稚園に連れて行かれるという話を聞き、現場訪問のときだけ私はその授業にまぎれこんだ。上沢謙二先生の幼稚園は茨城県の鹿島にあった。先生の書かれた子どものためのおはなしの本を私は数冊読んでいた。田舎の老翁という姿の先生と奥様が迎えてくださり、お茶とお菓子を御馳走になった。そのころは「おはなし」のおじさんが、子ども好きの家族とやっている小さな幼稚園があちこちにあった。上沢先生の幼稚園はそういう園だった。

田無の自由学園を訪れたときは、羽仁もと子、羽仁吉一夫婦が玄関まで迎えに出て下さった。昭和のはじめ、私が子どもだった頃、母は羽仁もと子の『婦人之友』誌の愛読者で、その付録の「歯磨き」や「お手伝い」の目録表に、出来た日はマルをつけ出来なかつた日はバツをつける、「甲子」「上太郎」という躰の評価表を母は好んでいた。勿論それは三日と続かなかつたのだが。私共が訪問した日、すでに老年の和服姿の羽仁もと子が多く



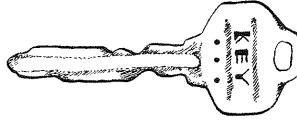
話され、大柄なご主人が控えめに傍らにおられた。ご主人がこの仕事を支えてこられたことがすぐに分かった。当時の通念と少しく違った夫婦の並び方に私は印象づけられた。

お茶の水女子大学付属幼稚園も、波多野完治先生に連れて行って頂いたのが最初である。そのときのことを思い出そうとしても、その後始終出入りするようになったときの記憶と重なって、どこまでが最初の記憶に属するのか判然としない。ただ、最初の訪問のときから、庭の砂場に熱中する子どもたち、積み木で遊ぶ子どもたちなどを見て、ここに私自身が幼いときから知っている子どもの姿があると思った。それは私がずっと心の中に描いて来た幼稚園の風景に合致した。

#### この頃の日記より

昭和二十三年四月十一日 素直な美しい子どもたち、私がかれらの前にあつて何をなすことができよう。かれらの方が私よりも美しく純真なこと幾層倍である。「徒に巷に声を挙げることをやめよう。傷める葦を折ることなく、仄暗き灯心を消すことなく」(イザヤ書42章)、いや、それ以上に、幼な子のか弱く美しい葦を折ることなく、透き通った純な心を濁すことのないようにしたい。

昭和二十三年四月三十日 私の実験は全くひっくりかえってしまつた。いま、灰を被つて伏している。私は子どものために何をなすことができるのだろうか。私の志は風の前の灯火のように揺らいでいる。私の心は林の木のように騒いでいる。この研究



で私は失敗しようとも、子どものために何かすることがあるのではないか。私のやり方が誤っていたただけだ。私は小さなひとりの人間として子どもを育てる道を研究する。卒業論文は、現在まで私が歩んできた心理学と私の理想との交差点にほかならない。

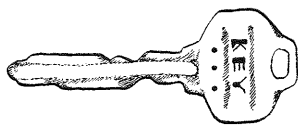
### 愛育研究所 — 戦争の余燼 —

昭和二十三年、私は相変わらず日比谷のCIE図書館でゲゼルの書物を読んでノートをとっていた。当時、私はまだ実際の乳児にふれたことがなかったので、山下俊郎先生に願って、愛育研究所の乳児室に入りにすることになった。先生は直ちに病院長の斎藤文雄先生と小児科の平井信義さんに紹介してくださいました。私は多くの時間を新生児室と乳児室で過ごしたのだが、その頃のことを考えると、赤ん坊の外見は見ていたが、それ以上のことを見ていなかったことを思う。

戦後の愛育研究所は、宮内省からの御下賜金を打ち切られ、研究者は他で生活の資を得て、手弁当で集まってきた。私共の大先輩であり、幼児文化の先駆的研究をされた竹田俊雄先生の家は空襲で焼けた後、先生は三階の研究室の一隅を衝立で仕切って寝起きしておられた。黒いモーニング一着で通された。いまでは考えられないことだが、この時代の児童研究者たちの苦勞を私共は忘れないでいたい。

愛育研究所には創立当初から、三木安正「異常児保育室」があり、戦時中閉鎖されてい





て、その部屋は幼稚園になっていた。幼稚園の先生のYさんは東京女高師の保母養成科の卒業生で、私に倉橋先生の本を読んだことがあるかと尋ねた。私が知らないと言うと、Yさんは、幼児の研究をする人が倉橋先生を知らないのは恥ではありませんかと言って、『幼稚園雑草』を私に下さった。大正十五年初版のその本の奥付には昭和二十三年七月十五日発行と記され、巻頭に著書による「新版の序」が「幼稚園令に代わって、幼稚園が学校教育法中に制定せられて一周年。東京女子高等師範学校付属幼稚園にて昭和二十三年四月 著者」と書かれている。黄色いザラ紙印刷で、私のその古い本はいまは頁がバラバラにはつれてしまった。これが私が読んだ倉橋惣三の最初の書物である。

「我等の途」という最初の頁から私は魅せられてしまった。これまでに学んだどんな心理学の本よりもこの著者は子どものことがよく分かっていると思っただ。倉橋惣三が心理学の先輩であることを知って、尚更に心強く思った。この中に「お茶の水幼稚園の焼跡に立ちて」という文章がある。これは勿論関東大震災のことであるが、私には第二次世界大戦と重なった。「くづれた煉瓦と、うづ高い灰と、焦げた木材の破片との中に、土台の礎石だけが整然と残っている。……ほんとうに何もなかった。ただ僅かに見出だし得たものは、幾つかの陶器製の白い人形の首だけであった。私は、ぞつとする様な心持ちでそれを拾ひとらうともしなかった。そして、空しく、灰の中にステッキを立てて佇立しながら、……」という叙述は当時まだ私共の周囲に見慣れた風景であり、これ以上の悲惨が戦争の現実であった。